

火災旋風

関東大震災、カリフォルニアの山火事」

大正十二（一九二三）年九月一日におきた関東大震災から六十六年が杉いようとしている。この大震災による死者行方不明は約十四万人、その死者の三割にあたる三万八千余人が東京・本所の被服廠跡（現在の両国国技館付近）での犠牲者である。

隅田川と鉄道の線路、そして大きな道路と三方を囲まれた約六万六千平方メートルの空き地に避難した人の上を、突如、カサに火災旋風が襲ったのが地震発生から4時間後の午後四時ごろ。猛烈な火災と混乱の中で避難した約四万人の九五パーセントが犠牲となった。この火災旋風は大火災によって発生する大型の火災つむじ風、火災旋風である。

惨劇の一時間前に撮られ、軌跡的に残った一枚の写真からは、荷車に腰掛けて食事を取る人や将棋をさしている人など不安の影が一向に間射られない。火災旋風がいかに予期せぬ突然の襲来であったかを物語っている。

この火災旋風の気象はこう推定される。

地震直後から、各所で発生した火災は、時間の経過とともに東京の下町を中心に急速に拡大し、午後三時には現在の台東区から江東区、墨田区に広がり、被服廠跡に迫っていた。運命の午後三時、ぱらぱらと降った雨がやむと同時に南西の方角から猛烈な風が吹き荒れ、一六時一〇分、一七分の三度にわたり竜巻が広場を襲った。毎秒七〇メートルと推定される烈風が人や荷車が舞い上げられ、その後にく火災が広場を焼き尽くした。その時間は、わずか二〇分という短い時間であった。

自然に起こる竜巻は、待機の状態が不安定になった時に入道雲が発達し、それがゆっくり回転しだすと、雲の底に発生する。被服廠跡を襲ったか巻も、まさに大火災によってできた巨大な積乱雲が回転したのである。

火災旋風は周辺に火災に迫ってきたとき、火災域を時計と反対回りに回転させる風が吹くという微妙かつ適度な気象条件を満足すると発生する。この火災旋風が起こると何万坪の大きな避難場所としても決して安全で

ないことを示している。大地震ではまず火災を最小限荷食い止めるかがいかに重要化を肝に銘じておきたい。